令和２年度熊本県立上天草高等学校地域との協働による高等学校教育改革推進事業
第１回運営指導委員　会議録

令和２年７月３日（金）
１０：００～１２：００
於　上天草高校視聴覚室

出　席　者

運営指導委員

堀江 隆臣 委員（上天草市長）
荒木 朋洋 委員（東海大学九州キャンパス長）
足立 國功 委員（熊本ソフトウェア(株)代表取締役社長、熊本県産業教育振興会会長）
田中 尚人 委員（熊本大学 熊本創生推進機構 地域連携部門 准教授）
松冨 浩之 委員（熊本日日新聞社上天草支局長）

県教育委員会

岩本 修一（熊本県教育庁 県立学校教育局 高校教育課 課長）
松村 加奈子（熊本県教育庁 県立学校教育局 高校教育課 高校魅力推進室 室長）
野田 明（熊本県教育庁 県立学校教育局 高校教育課 高校魅力推進室 課長補佐）
→欠席
清本 大介（熊本県教育庁 県立学校教育局 高校教育課 高校魅力推進室 指導主事）

学校関係者

田中篤（校長）、草原俊明（教頭）、野崎公明（事務長）、清村純一郎（教務主任）
農田真紀（進路指導主事）、元田有祈（カリキュラム開発等専門家）
浅利竜生（研究主任）、森川弘毅（研究副主任）

オブザーバー参加

鬼塚 正二（上天草市役所 企画政策部 企画政策課 地方創生係 係長）

内　　容

１．開会

（１）県教育委員会あいさつ（岩本課長）
（２）学校長あいさつ（田中校長）
（３）関係者紹介
（４）日程説明

２．事業説明

「令和元年度事業報告」並びに「令和２年度事業計画」を研究主任が説明。
質疑なし。

３．協議

研究協議の座長を田中委員にお願いし、座長が協議を進行。以下はその要旨。

（田中委員）上天草高校の取組は学校教育の分野として効果をあげているだけでなく、地方創生という面でも評価が高い。このふたつ分野のシナジー効果で上天草を元気にしている。この取組の原点であるコミュニティ・スクールと起業家教育（アントレプレナーシップ）をやっているというのが強み。これを３年間で磨いてあげることが大事。

また、コロナ感染症の影響で２か月活動できていない。もともと２年目というのは停滞しがちな傾向にある。しかし、この大変な社会情勢を“バネ”にしてほしい。普通のことをしていたらパフォーマンスは落ちるので、今年は逆に“攻め”てほしい。２年目で一番良くないのは“守り”に入ることで、せっかく革新的な事に取組んでいるのに、そのスピードを止めると言うことは良くない。昨年の取組で生徒が良い方向に進んでいると実感している。子どもがやりたいと言うことはやらせてあげる。大人が疲れてしまって、子どもたちについていけなくならないように、安全面も含めたマネジメントをしっかりやっていくことが大事。

今回は時間も限られているので、内容を課題改善に絞って協議を進めていきたい。一番困っていることを解決することが良いので、現状を教えて欲しい。特に先生方が疲れていないか心配。

（研究主任）疲労感については、個人的には楽しんでやっているので感じていない。課題に関しては、生徒の研究を外部に協力を仰ぐレベルまで引き上げることと、お忙しい方たちにどこまで相談してよいか心配。

（校　　長）赴任前は、たくさんの指定事業を抱えて職員が疲れているのではと心配していた。しかし、この事業があるから学校が軋んでいるようには感じていない。生徒も学校ものんびりした気質なので、そのペースで職員が無理することなくやっている気がする。アウトカムに拘るつもりはなく、生徒の意識が変わっているという成果を大切にしていきたい。

外部との連携という課題については、皆様のお力を借りなければならないので、もっと良い方法があれば御助言いただきたい。

（元田ＣＤ）この取組をすることで、最終的には、探究の授業を生徒と先生がともに探究を深める時間にしたい。先生が「答えを準備しなければ・・・」と先生が用意した答えに向かって授業に取組むのではなく、生徒と一緒に上天草を知り、一緒にゼロから答えを創りだすようになってもらいたい。その中で負担

感を減らすことがコーディネーターの仕事だと思っている。

また、学校から地域の人に協力をお願いするのが憚られるように、地域から見ても上天草高校は敷居が高いと感じられている。互いに協力したいという思いはあるが遠慮しているようなので、地域の方を高校に呼び、生徒を地域に入れる方法を考えていきたい。

３つ目の課題は、生徒のアイデアを実現させるために地域との協力体制の構築方法。「南阿蘇の空き地を使ったサバイバルゲーム」「喫茶店の駐車場でのドライブインシアター」「樋合の水上アスレチック」など熊本で実現した取組は、生徒がビジネスプランとして考えたアイデアとよく似ている。アイデアを実現する一歩が踏み出せていないので、「無理だ」と決めつけるのではなく、実現できる体制の構築や気運を高める方法を考えたい。

（田中委員）この話は地域の方にも聞いてほしい内容で、マッチングの問題はあるにせよ、地域と高校がもっと絡んでいいのではと感じる。市役所がやりたいことに関しては、既にオファーがあるとの事なので進めてもらい、高校生がやりたいことを地域がどうするか考える機会があっても良い。

課題は整理できたので、委員の方から、課題解決の方法や、やってみたいこと、必ずしも答えがあるものでなくてもアイデアで構わないので教えてください。学校側のリクエストだけでなく地域社会側のリクエストがあっても良いと思っている。

（堀江委員）（学校と）地域の団体との接点を創っていくのが市役所の仕事なので、気軽に相談してもらえればマッチングできる。

民間の人が学校に出向いて話をすることはハードルが高いので、生徒が彼らのフィールドに出かけていくことで、民間の方も自分のペースで話せるので、生徒が出かけて行くとより実践的な教育になる。

（荒木委員）地域の方が学校に対して敷居が高いと感じているのは大学も同じ。今日、地域貢献というのが大学の使命として非常に重要だが、接点がないのが現状。だから、地域の人たちに「高校になにができるか」を発信し、“情報共有”することが大切。高校生側も自分たちの発想を実現させるための情報が不足している。そのために地域理解から始めているので、高校生に地域の資産や特色を理解させ、そこから若い柔軟な発想を引き出す必要がある。そこから地域との接点が見いだせるので、“情報の共有”から始めなければミスマッチが起こる。

また、特定の先生に負担がいかないように全校体制で取組んでもらいたい。

（田中委員）大学でリモートの授業を実践しているが、先生が楽しんでいる授業ほどうまくいっている。リモートで時間制限があるので研ぎ澄ます必要があり、新鮮かつ教えるという行為が本質的になって面白いとかんじるようになった。コロナというピンチをチャンスとして捉えることができたと感じている。この事業においても“研ぎ澄ますこと”と生徒も先生も“みんなでやる”ということを大切にして欲しい。今年は１・２年生対象で過半数が取組んでいるので、良い効果も期待できる。みんなでやるという意味で３年生にも活躍の場を与えると、波及効果が期待できる。

（足立委員）熊本県産業教育振興会における今年の重点目標は各支部の活性化。どうしても都市部での活動が多くなるので、郡部で自治体との関係を強化した活動を推進したい。上天草市は市長のリーダーシップで、自治体と学校の密接な関係が保たれている。

県と協力してテレワーク支援プロジェクトを立ち上げている、リモート教育も含めて、今までと違った世の中になりつつある。リモート社会になれば、学校と外部のコンタクトも容易になる。with コロナで上天草の魅力と外部をつなぐ環境が良くなったと考えている。

内閣府が進める、都会の有能な人材と地方を結びつける「関係人口」の流れで、優秀な方の知恵をリモートで借りることができる。

with コロナで社会全体が変革を余儀なくされ、不連続性があっても良いと考えている。この事業において、当初と計画を変更し、もっとリモートを使った活動に予算を使うなどの変更をしても良いものか聞きたい。

（松村室長）今の段階ではなんとも言えない・・・

（田中委員）文科省に提出している計画を、思い切って変更して“攻め”ていけるように県としてサポートをお願いしたい。うまくいってることはそのまま進め、課題だと感じていることはドラスティックに変えていけるようにしてほしい。業界が変わっているのだから高校のさらに若い高校生なら変わっていけるので、どんどん変えていくようにしてほしい。

「聞く」「話す」「表現する」プロジェクトでコンピテンシーを小中学校まで広げる取組は評価できる。ただし、コンピテンシーは広げていってもルーブリック自体はどんどん変えて構わない。

テレワークやリモートはプラスにもなるがマイナスにもなりやすい。都会人たちの草刈り場にならないように注意が必要。まずは、上天草市の方たちとの繋がりをリモートも含めて繋がり、それでも足りなければ熊本県内で繋がりをもてるよう、つながる相手をうまく使い分けてほしい。

（松冨委員）外部とのつながりを大人が用意するのではなく、子どもたちにつながらせてみてはどうか。意外とＳＮＳでつながれる可能性もある。

　また、リモートだけでは感じることが難しい“肌感覚”もあるので、市役所の人などを介して、地域の人たちに会いに行くことも大切。

（田中委員）実際に出向いて直接会うことと、普段会えないような人とつながれるリモートはどちらも大事。

（鬼塚係長）市役所で個人的に異業種交流を行っている。その交流の場を上天草高校に設定して、高校生も含めた交流ができないだろうか。高校生が憧れる方の講演会を上天草高校で実施し、地元の事業者も一緒に聞いて、その後ワークショップを行うことで交流し、生徒と地域とのマッチングができるのではないか。

（田中委員）高校生は親和性が高いので、行政の縦割りや上天草の４地区の隔たりなど関係なく話ができるのではないか。

（研究主任）オフィシャルな繋がりで依頼をすると、結果が求められ、着地点がどこなのかハッキリできない活動はやりづらい。本当は「やってみて」、その過程を大切にしたいのだが、オフィシャルなお願いに対するオフィシャルな返答になってしまう。ちょっと相談するなど、オフィシャルじゃない繋がりを広げる方法が必要だと感じた。

（田中委員）（本来は）過程が問われるはずなのに、オフィシャルでいくと、どうしても結果や成果が求められる。良い塩梅でアンオフィシャルな繋がりを築くことがその地域の幅になる。上天草市がそれをできる地域になるために、上天草高校がリーダーシップを発揮できると良い。「高校生が頑張っているのだから、地域の大人も頑張らなきゃ」が理想。大人は失敗が許されないが、高校生は許してもらえるので、どんどん挑戦することが重要。

（清本指導主事）計画している探究活動が実現することを期待しており、今年の結果が来年以降に大きく影響する。

（田中委員）地域への波及効果ばかりフォーカスされるが、探究活動などをとおして求める人材を育成するのが目的だが、うまくいっているか。

（研究主任）昨年は生徒の考える時間を確保できず深まらなかった印象があるので、今年こそ「自分で考え、自分で繋がり、自分で実行できる」ようにしたい。今年が正念場なので、探究活動が自走できるような仕組みを作らなければならない。

（田中委員）生徒の探究活動に絞って、委員の先生にアドバイスをお願いしたい。

（荒木委員）この時代何が正しいか分からない。その地域に産業を興さなければ、地方創生ができないわけではない。フレキシブルな発想、フレキシブルな探究力を身につけることで地域のリーダーになれる。

（田中委員）次のスタンダードを考えなければならないということ。

例えば、道路の新しい使い方が議論されている。今まで道路は車のためのものだったが、賑わいを演出する場として利用するという考えがある。コロナを機に三密を避けるためにオープンカフェとして活用されている。

次の時代のスタンダードをどうつくるか。そのとき上天草に何が必要かを議論する必要がある。

（足立委員）with コロナ、after コロナにおいて、企業の研修活動はリモートが主流になっている。もはや特別なものではない。そうなってくるとフェイス to フェイスではないコミュニケーションの教育が必要。子どもたちは早く馴染むと考えられるので、探究心があればつながれる。リモートでも怯まず、やりとりできる生徒を育成して欲しい。

同時に、人間力を身につけるために地域社会と密接につながれるよう、交流していく必要がある。

（田中委員）ＩＣＴ技術については、部下が上司に使い方をレクチャーする場面も見られるなど、若者は当たり前のようにやっている。

逆に彼ら「デジタルネイティブ」の世代は、人間力が不足している。この両方を育成する必要がある。

「当たり前が変わってくる」ので、対話型で物事を解決していくことが重要。結局は「聞く」「話す」「表現する」力が必要となってくる。

（田中委員）松冨委員は上天草にどんな印象をお持ちか。

（松冨委員）上天草は観光地なので外から人が流入しやすい地域。ただ、その人たちと地元がどれだけ連携できているか分からない。小さいコミュニティでの繋がりが強い地域だと感じている。

（田中委員）新しい観光（国内旅行が増えるなど）になる。「長く滞在する」や「地元の人と交流する」といった新しい産業を創っていく必要がある。上天草の海が資産になるかもしれないし、過疎だから学べるものがあるなどがコンテンツになる可能性がある。

ドイツの中山間地では限界集落を「マージナルエリア」と呼んでいる。そこでは、「足るを知る」という言葉の通り、自分たちの地域に必要なものを必要なだけという政策をとっている。

（堀江委員）（市では起業家教育を進めているが、）起業することを難しく捉えないで欲しい。失敗を恐れると取組み方が制限される。起業家教育を推進する真意は、地域のことを知ってもらって、地域と繋がりを持ってもらい、地域で頑張りたいと思う人材を育てたいと考えているのであって（起業が目的ではない）、大らかな気持ちで、先生も生徒が楽しくて、おもしろいと感じるやり方をすれば、必然的にうまく行くと確信している。

コロナウイルスの影響で様々な取組がリセットされているが、地方創生関しては逆に進むと考えている。都市部の感染リスクを避け、地方に住居を構えたいと考える方が増えてもおかしくないと感じている。

我々が想像できないことを考えつくのが高校生の良いところなので、その柔らかさを大切にしてもらいたい。

（田中委員）探究活動のおもしろいところは「自分で設定する」というところ。起業家教育とは言うけど、起業が目的ではなく、研究が（夢想ではなく）現実社会とつながっているという感覚が重要。

「失敗しても良い」という教育は難しいが、先生方も解を持っていなくて良い。転勤して来て地元を知らないのは当然なので、謙虚な気持ちで取組み、人生の先輩として「失敗してもいい」という事を教えて欲しい。

循環型でないと終わりが来てしまう。この活動が補助事業じゃなくなっても、上天草高校として循環（持続可能）していかなければならない。「先生が異動しても先輩が知ってる」だったり、本質的な「失敗してもいい」ということを伝え続けることが大切。

個人の全人格をかけて起業にチャレンジする人がいるのに、失敗したら（借金として）責任を全て負うのはリスクが高すぎる。山口県の長門湯本温泉では、（貸付ではなく“まちづくりファンド”から株主資本として資金が投入される仕組みがあるので、）失敗に対する責任を分散させている。このようにうまくいくか分からないチャレンジを地域で支えることができれば良い。

（教　　頭）県内の半数以上の高校が定員割れをする中、高校の魅力を発信するか、地域とどうつながるかがキー。本校の取組は、今後の高校教育の在り方に還元できるものがある。本校の活動と開発したカリキュラムは、県内だけでなく全国に発信できるものにし、地域創生に貢献できると良いと思っている。

もう一つのキーワードは「持続可能」で、この取組が特定の職員がいなければ運営できないのではなく、新しく異動してきた職員でもできるような仕組みにしていくことが大切。文科省の指定が外れても継続していけるように着地点を考えていきたい。

（岩本課長）以前から上天草市と上天草高校が深く連携していることを羨ましく思っていた。

グローバル化と言っているが生徒は、世界人口は答えられても自分の住む市町村の人口を答えることのできる生徒は少ない。地域との連携を図るには、地域の現状を知らなければならない。世界に目を向けるというベクトルは素晴らしいが、ベクトルの始点である“自分が今立っている場所”“自分が生活している場所”にも目を向けなければならない。その視点がなければ、探究学習は机上の学習になってしまう。上天草高校生徒は、素晴らしい環境に甘んじることなく、地域を知り探究活動に取組んでもらいたい。

（田中委員）（田中准教授の）ゼミで「サスティナブル」の反対語は何か議論した。結果、反対語は「変化を拒む」に落ち着いた。変わらないで良いことは変える必要はないが、変えていくべきは変えていくのが「サスティナブル」。

ちゃんとしたカリキュラムを創ることで「誰がやってもできる型」を作ってもらいたい。型に拘るのは本末転倒で、人によってカスタマイズされるのは当然だとしても、基本となる型をしっかり作ることは大切なこと。

これは“大いなる挑戦”として、楽しんでやってもらいたい。

（進路指導主事）昨年の取組で、現２年生（対象生徒）について、「聞く」「話す」「表現する」プロジェクトの成果が定着してきていると感じている。

（田中委員）地道な成果が現れているということなので、継続すべき事は継続して欲しい。

今回の内容は参加者だけでなく、地域の人たちにも知って欲しい内容。発信できるチャンスがあれば発信してもらいたい。

（足立委員）大学や研究機関との連携についてはどのように考えているか。

（校　　長）生徒が研究を進めていく中で、個別に繋がりを持てるようにしたいと考えている。

（元田ＣＤ）生徒の研究内容に合わせて、必要なことをアドバイスしていただく事と大学生が上天草で活動される際に、一緒にフィールドワークを体験することを想定している。

（荒木委員）東海大学の観光学科の先生に、熱心に地域との連携を進めている方がいる。このような方にアドバイスを求めるなどすると良いと感じた。

（足立委員）産業教育振興会では、学園大学や崇城大学と協定を結んでいる。これは高校生が大学生に教えてもらう活動で、同じ世代同士の方が良いと考えている。

（田中委員）大学は個人営業で、先生方は縄張り争いもなく、分野が違えば競争は起き

ない。やりたいことを相談いただければ対応してもらえるし、マッチングもできると思う。連携ありきではなく、一緒に活動することで連携が深まると感じている。

４．閉会

（１）学校長あいさつ（田中校長）

（２）県教育委員会謝辞（松村室長）